

大会講演

「西行法師生誕の地」として知られる和歌山県紀の川市の「ホール田園」にて紀の川市短歌大会を開催しました。

今年で八回目を迎えた伊香保温泉「ホテル天坊」での開催でした。

両大会ともに、お集まり下さった方々が熱心に耳を傾けておられた講演をご紹介します。

NHK学園生涯学習フェスティバル

●紀の川市短歌大会

と き／二〇〇九年四月四日（土）
と ころ／和歌山県紀の川市

演題 作歌のヒント

講師 永田和宏先生……3

●伊香保温歌大会

と き／二〇〇九年五月二十一日（木）
と ころ／群馬県渋川市

演題 新しい歌と古い歌

講師 岡井 隆先生……13



「新しい歌と古い歌」

岡井 隆

今日は「新しい歌と古い歌」ということ
でお話したいと思います。

この頃、若い人と歌評会をやりますと、
「これは古風な歌だよ」とか僕の歌をい
うのですよ。初めは無記名で出しますか
ら、誰の歌か分からない。蓋を開けると、
僕の歌だとわかるのですね。私はムツとし
たりするのですけどね。

私も新しがり屋ですから、口語調の歌を
作るでしょう。そうすると、岡井さんも無
理をして作っているよね、こういう言葉は
使わないんだよね、ひと昔前の口語だよ
ね……等々、悪口を言われます。それはそ
れで僕はいいと思っていますけどね。

我々若い時から、やはり自分なりのオリ
ジナルな歌を作ろうと思ってきました。オ
リジナルなというと、今までになかったと
いうことでしょう。

万葉集にもなかった、古今集にもなかつ
た。近代に入ってもいろいろな歌人がいま
すが、そういうのとはひと味違うというこ
とを目標にしました。

それがよかつたのか悪かつたのか、何も
そんなに無理をすることはなかつたかなと
も思いますが、わりと楽しいことは楽しい
のですよね。

つまり、いろいろな場面で発表すると、
みんな驚くわけでしょう。これはちよつと
変な歌だなとか、今までになかった歌だ
とかね。

今までになかった歌というのが、ある意
味で新しい歌なのかなと思います。それか
ら、古い歌というのは、私が現在悪口を言
われているような古風な歌ではなくて、形
は古いしどこかで見たことのあるような歌
だが、なかなかいい歌だというものでしょ

うね。

今日は、古きよき歌、それから新しい歌
の中でも妙にとつぽいことをやって無理矢
理作っているというのではなくて、いかに
も落ち着いている中に、短歌独得のよさが
入っていると感じられる新しきよき歌、そ
ういう話をしようかなと思っています。

若い人たちの文語調

皆様は、おそらくオーソドックスな歌を
作っていらつしやる、あるいは雑誌、新聞
などでご覧になっていらつしやるのではな
いかと思います。

それで今日は、私より四十も五十も若い
人たちの歌を、同人誌などから選んでみま
した。こういう歌は普段、あまりご覧にな
らないでしょう。



爺を驚かせてやろうというのでしょうか、そういう雑誌が私のところにどんどん送られて来まして、しかし、こちらも相当狸でありますから、驚かないのですけれどもね（笑）。

そういう若い人たちの歌を読んでいますと、諸君は、今やつと二十歳か三十歳、それまでのことを知らないからで、私は明治時代以来のことをいろいろ読んでいまして、自分の体験した戦後六十年を考えても、こういう歌は昔あったなと思うのです。だから、面白い歌ではあるけれど、今初めて読むような歌では決していない。

しかし、あつ、これはニューアイディア

だなと思うと、そういう歌はこちらも好奇心がありますから、面白いなあ、これは何をやっているのだろうかと考えます。

そんな、あまり皆さんのお読みにならないようなものから、少し選んでみました。

日ごと日ごと口語と文語を行き来するわれわれわたしわれわたしわれ

多田百合香「pool No.1」

多田百合香さんは、大学を卒業したばかりで、私は大学に入った頃からですかね、知っていました、若々しく魅力のあるお嬢さんです。多分、歌を作りだしたのは十八歳くらいからだと思うのですが、今風の口語的な歌ばかりかというところではないのです。

面白い歌で、こういうのは作者の考え方だろうと思うのですが、自分は毎日毎日口語と文語の間を行き来している。この人は国文系の人ですから、当然そういう歌を作ったり勉強をしているわけです。そこまではないのですが、歌の世界では「われわれ」「われ」という言葉を使いながら、片方で「わたし」というのは、短歌の方でも使うが、日常生活でも使う。これはなんで

しょうね、考えてみると面白いですね。歌の中でも「われ」と使わないで「わたし」と使う場合もあるでしょう。

こういう若い方でも、文語的な「われ」という言い方を面白いという。そして作ってみようとするのですね。この歌は、短歌についての短歌、あるいは言葉についての短歌と言ってもいいのですが、割合い若い人が好きで作りますね。つまり、歌というのはどういふものかなということ、考えるのですね。

イヤホンをすんすん耳から抜いている君はガジュマルをみたことがない

多田百合香「pool No.1」

「すんすん」とか「みたことがない」とか、こういう口語的な歌も作る。相手の男の子が耳からイヤホンを抜くというのは分かりますよね。じゃあ、イヤホンとガジュマルとどういう関係があるのかというと、関係ありませんね。

ガジュマルは沖縄などに生えている植物ですが、ガジュマルをみたことがないというよりは、「ガジュマル」という言葉、普通日常語にはない言葉、そういう面白さを

使っているのですね。

今日はこれから、「葉」が題詠の題になって皆さんお作りになった歌の批評があると思うのですが、「葉」という言葉を一首のなかでどういうふうになしたらいいか。そういう意味で「ガジュマル」とか、名詞を歌の中に入れるというのは、大事なのです。これ、「ガジュマル」でなくて他の植物だったら、この歌はどうでしょうか。

表現の新しさ

鶏にわとりの筋肉重ねおかれたる聖夜のデパート地下 かがやけり

内山晶太「pool No6」

この作者もまだ二十代です。こういう歌は、私は非常に安心して読むのです。どうしてかという、今は「デパート」というでしょう、それをわざわざ「デパート地下」ときちつと書いて、しかも「かがやけり」と。次の歌も「帽子となりぬ」です。これは明らかに文語のものの言い方です。口語だと「デパート全体かがやいている」

とかなんとかなりますよ。

こういう文語の調子の歌を、二十代の若い男の子が、やっぱり短歌というのはこれだよ、と選んで作っていらっしやる。これらは、若い人たちが作っている「pool」という同人雑誌に載っている歌で、歌集にもなんにもなっていない。皆さんも読んでこたがないでしょうし、私も初めて読む。そういう意味では、現代の新しい歌ですが、その中で若い人自身が文語的な助動詞なんかを使っているわけですね。

鶏の肉なら肉といえはいい。鶏肉とかね。それを「筋肉」といっているのはなんなのだろう。そこところが新しいところではないでしょうか。筋肉というのは、普通は物を持ち上げたりしてぎゅつと緊張する、何かの力仕事をするという時に使いますよ。

この歌を読むと、そうか、夕べ食べた鶏肉、あれは鳥の筋肉だったのかと思うではないですか。

クリスマス夜の夜に、デパートの売り場に、日本では七面鳥でなく鶏がおいである。あれをこれからわれわれは食べるんだ

が、あれは鶏の筋肉なんだよなと彼は思ったのでしよう。

止みがたき怒りをまえにかなしみは忘れられゆく帽子となりぬ

内山晶太「pool No6」

この歌も、「止みがたい」ではなく、「止みがたき」です。今、カンカンになって怒っている状況がある。怒っているのは「まえに」といっているから、相手の人なのでしよう。パンパン怒っている。あるいは自分であれば、どうしても怒りが抑えられない。

そういったものが片方に対置されると、さっきまで自分の中にあつた「かなしみ」というものは、怒りによってうち消されてしまう。それを「帽子」という言葉でいう。さっきの「筋肉」と同じで、面白いといえは面白いですね。

私もしょっちゅう電車の中などに帽子を忘れるのですが、帽子というのは不思議に忘れられやすいものですね。被ってきたのだから、帰りもちゃんと被らなければいけないに決まっているのに忘れてしまう。作者は忘れやすいものの対象として「帽子」

を出してきている。

止みがたい怒りを前にななしみは忘れられてしまいましたよ、ではなくて、忘れられてゆく帽子になってしまった、という言い方ですね。

比喩の面白さ

次の歌の石川美南さんは、三十歳少し前の、大学はもう出ているいろいろなことをやっている人だと思っています。

夕暮れを統べてゐるのが私なり閉館

間際の図書館にゐて

石川美南「pool No6」

選り好みせぬと決めたら暗闇に口をば付けてすずいとすすれ 同

図書館というのも、この頃よく歌になりますね。図書館にホームレスの方などがいらつしゃって、本を読んでいるのか寝ているのか分からないという状況があったり、ホームレスではないのですが、暇でたまらない人が、朝から晩まで新聞を読んでいたり、図書館自身の風景が変わってきています。われわれ、図書館に行つて過ごす時間

というのは、日常生活と違う時間がありますね。

「夕暮れを統べてゐるのが私なり」、この「統べて」というのは統率しているということでしょう。図書館は閉館間際である。自分はそこにいて、しーんと静まりかえつた図書館、夕方を自分自身、私という存在

が統治している、統率している。命令も下せるし、全体を取り仕切ることもできる。

いわば夕暮れの王様のようなものだといふ、そういう感じを作者はその時に持ったのですね。

二首目、選り好みしないと決めたら、口を付けてすずいとすすれと。

目の前にオレンジジュースがあつたり冷たいコーヒーがあつたり、あるいは果物があつたりいろいろする。どれでもいいんだ。どれでもいいのだから、それと決めたらすずいとすすれというのですが、そのするものはジュースでも果物でもなく「暗闇」なのですね。

暗闇というのは、内山晶太さんの歌の「帽子」などと同じように、一つの比喩になっています。

図書館とは直接関係ないのですけれども、周りが真つ暗になってきた。あるいは世の中がほとんど変なふうに傾いて来て、暗くなって来た。でも怖れてはならない。暗闇に、もう選り好みしているわけにはいかないのだ。

世の中は百年に一回という大不況で、出口のない、目標意識のない若者たちが非常に増えている。自分たちも一体どっちを向いて行つたらいいのか分からない、そういう時代である。これは明るいとは言えませんがね。

でも、真つ暗闇の、希望のない世の中に對して、これは向こうから来ている状況ですから、選り好みしているわけにいかない。だったら、この暗闇に口を付けてすずいとすすつてしまつたらどうだと。かえつて自分の覚悟が決まるぜ、とそういうふうな歌かなと思います。

これは私の勝手な解釈で、皆さんは違う読み方をなさるかもしれません。また、閉館間際の図書館を若い女性が統率しているなんて、これはもつと別な意味ではないかと思われられるかもしれない。どういうふう

解釈してもいいのです。

躍動する言葉を

私の好みではありませんが、ここに出てきている歌は、なにか歯切れがいい。そして、暗闇が何だろうとか、夕暮れを統率するというのはどういう意味だろうかとか、そういうところに多少動きはありますし、「忘れられゆく帽子となりぬ」ってどういう意味だなんて言い出したら、いろいろ解釈の上での動きはあるでしょう。でもイメージが、なにか映像みたいなものがたつのです。一つのことをズバツと言っているという意味では、こういう若い人たちの歌は、私は賛成しています。

これは私たちが若かった今から半世紀以上も前の時代にも、短歌というのはこういうものであったのです。

古い歌の中のよいもの、新しい歌の中のよいものというのは、一つのことをずばりと行って、しかも言葉の響きがいい。たとえば「ずずいとすすれ」とかね、先ほどの多田さんの「すんすん抜く」とかね。こう

いうのはオノマトペ、擬音語、擬態語なのですが、日本語の一番お得意の巻とする言葉ですね。

皆さんよく言うのは、「しんしんと夜が更けてゆく」、それから「びょうびょうと」などというのは、犬の吠える様ですが、歌の場合「ワンワン」というわけにはいかない。斎藤茂吉なども、びょうびょうと犬が吠えているという歌を作りました。



いくら耳を澄ましても、犬の鳴き声が「びょうびょう」と聞こえるわけがない。イヤホンを抜く時に「すんすん」という音がするわけではないでしょう。暗闇をすすっている音がずずいとするわけがないのですよね。でも、音感というか、音の感じが面白いではないですか。

オノマトペをいろいろな形で工夫して歌を作っていらっしやる方がたくさんいます。そういう歌を読んで皆さんも使ってみて下さい。ずずいと膝を進めるなんていうのはよく言いますよね。

短歌というのは三十一音しかありませんから、その中で言葉をどうやって躍動させるかというのが一番大事でしょう。ですから、あまり妙なことをやる必要はないのですけどね、こういう言葉遣いが、一つの面白いところではないかと思うのです。

若い歌人との楽しみ

野口あや子。あだ名「極道」ハンカチを口に咥えて手を洗いたり

野口あや子「風通し その1」

呼び捨てにさり・さり・さるる菌を当てるソーダアイスのうすき青色

同

野口あや子さんは、今度歌集を出されましたが、十五歳から二十歳までの作品でした。今二十歳を少し過ぎていると思います。私は全国に行つてこういう若い人たちに会います。僕にしたら孫か、あるいは曾孫くらいの年齢でしょう。そういう若い人たちが生意気なことをいう。

僕の歌に關してでも、「岡井さんは抒情的とおっしゃるけど、抒情的とはどういう意味か、提示してごらんなさい」という作家としては一対一ですからね。二十二歳だろうが八十二歳だろうが問題ありません。向こうも真剣にいますから、こちらも真剣になつていきます。

五年、十年前までは、ちよつとこうした勢いがなかったのですが、今、とてもいいなと思つています。多田百合香、内山晶太、石川美南、野口あや子、これから挙げた、斉藤斎藤、みんな二十代から三十代ちよつとという人たちですが、こういう面白い人たちが出てきました。短歌は停滞し

ているなあ、いい人が出てこないなあ、などと思つていまして、こういう人たちが出てきます。そのかわり「岡井さんの歌、古臭い」などと生意気なことを言われることは、覚悟しなくてはいいけない。

野口さんの歌にもどりましょうか。野口さんは数年前に「短歌研究」の新人賞をとりました、今注目されている一人です。たしかご病気があつたりして、高校は定時制を出て今大学に行つていらつしやるのかな。十五歳の時から歌を作っていますが、国文学を極めているとかそういうのではないのです。でも、言うことは鋭い、そして僕に対してもズバズバとものをいう、そういう人です。

一首目を読むと、皆さん、どんな女性かと思うでしょうが、ほっそりとしたかわい女性です。それがなんであだ名「極道」なのですかね。

メッセージ性のある歌

実はこの歌が載っている「風通し」という同人雑誌のあとの方には、ありがたいこ

とに掲載された作品の、十人くらいですが、お互いの作品をインターネットで批評し合っている、いわゆる歌評会の記載がわーつと出ているのです。

たとえば野口あや子が三十首出していい。それに対して他の人たちがいろいろなことを言う。そうすると、またそれに対して野口あや子が「ご批評ありがとうございます……」ときました。私といたしましては……とか言つて反論しているのです。

そういうのを読んでいますと、われわれが二十代の頃にやっていたのと同じだなあと思ひます。同じだなあというのは、内容という意味ではないですよ。若い同士が競争し合つて、しかも速慮会積なしに相手のことをいう。と同時に相手の中のいいものはいい、あるいは驚いた、感心した、面白かつた、それはそれとして認めていく。

インターネットのブログとか、私は全くITやりませんので、実際には知りませんが、ネット系といわれている歌人が増えています。携帯短歌なども含めてです。

昔から、作者のものの考え方、生き方とい

うものを作品の中に出すというのが短歌の一つの特徴——これを私性といいますが、それがどうも消えてしまっている。

もう一つは、若い人の作品は、ほわほわほわーとしていて、何も言っていないような、つまりメッセーj性が弱いというようなことを言います。

ところが、「野口あや子。あだ名『極道』ハンカチを口に咥えて手を洗いたり」、これは立派なメッセーjではないですか。それから、「口に咥えて手を洗いたり」は、さっきの「帽子となりぬ」「かがやけり」などと同じように、ちゃんと助動詞を使っているでしょう。やはり短歌というのは何かということを知っていてやっている。面白いと思いますね。

「呼び捨てにさり・さり・さるる」というのは、言葉は遊んでいますよね。呼び捨てにさるる、されていますよということはいうために、「呼び捨てにさるる」とだけいわないで、「さり・さり・さるる」とまるで文法の活用形のようなものを出してきて、面白がっている。

「おい、あや子」とか「おい、野口」とか

いわれた時に、友だちがいった場合と、恋人がいった場合と、同性の人間がいった場合とは違う。今まで「野口さん」とか「あや子さん」とか「あや子ちゃん」とかいつていたのが、「あや子」と言うようになる。友だちから恋人にグレードアップする時に、わりと呼び捨てにしたりするでしょう。同時に、呼び捨てにされた時に、「呼び捨てにするなよ」という感じにもなる。

先ほど申しましたが、野口さんはほっそりとしたかわいなお嬢さんですよ。でも内部では、このようにひじょうに強い芯を持って、歌を作っていらっしゃいます。

ソーダアイスに歯を当てながら、そのうすき青色を見ながら、ああ、呼び捨てにされちゃったよ、と。「さり・さり・さるる」と「歯を当てる」は、響きが反応してくるというのかな。いいですね。

私は短歌というのは結局、音韻を含めての、五七五七七を含めての、調べの文学だろうと思っています。ものごとを言うのではなくて、ある調べに乗せてふわーっと……歌ですからね。むしろ旋律みたいなもの

のが大切で、それにある意味を乗せていく方が大事なのではないかと思っています。

「呼び捨てにされて嫌だったな。それで自分はず青色のソーダアイスに歯を当てているんだよ」と言えば、意味的には通じますよね。でもそうではなくて、野口さんはこういうふうひっくり返してやっている。

作者の背景を知る

それから先ほど、この頃の若い人たちのネット短歌などは、メッセーj性が薄いいいしましたが、もう一つ、一体誰が歌っているのか、歌っている主体がはっきりしないではないかと思いました。でも、野口さんなどは、「私、野口あや子さんだよ、十五歳から歌を作っていて、今二十二歳なんだよ」と、野口あや子という人物を出していつて、それでこういう歌を作っているのですね。

そうしますと、僕などのように野口さんに会ったことのある人間は、この歌は彼女の歌なんだ、と思うではないですか。この

ことはとても大事ですよ。何歳の人だ、男の人だ、女の人だ、今は大学生なのだから、そういう作者の性格、キャリア、今おかれている生活状況、それを基本にして歌を解いていくというのは、古くさいかもしれないけれど、やはり私は短歌というものがもっているすごく大事なことだと思うのです。

その次の斉藤斎藤さん、不思議な名前ですが、もちろんペンネームです。姓の斉藤と名前の斎藤の「さい」の字が違う。非常に工夫しています。斎藤さんはここ四、五年、ひじょうに注目されるようになりました。この人も「風通し」という雑誌に三十首出しています。

殺さずに牢屋につないどけばいい
水でよいのに飲む烏龍茶

斉藤斎藤「風通し その1」

この歌は、メッセージの歌ですね。何かというと、裁判員制度が実施されましたが、終身刑と死刑との違いはどこにあるのだと。そのことが詞書きでいろいろ書いてあって出てきた歌なのです。彼は終身刑は認めるが死刑は認めがたいということを開

接に言っているのだと思います。

「水でよいのに飲む烏龍茶」は、多分、水が死刑で烏龍茶が終身刑。僕など昨日も烏龍茶を飲みましたが、これが終身刑の味かなと思っしまいましたけどね。要するに、同じように飲むのだったら、同じように裁くのだったら、そこに差があるよと。烏龍茶というのは味付けがあるわけでしょう。殺さずに牢屋につないどけばいいというのが終身刑ですね。

これは三十首の長い物語の中に入っている一首ですから、ここで出すには問題があるかなと思ったのですが、私が言いたかったのは、こういう比喻を使ってメッセージを伝えようとする意思、なのです。次の歌もそうです。

死因の一位が老衰になる夕暮れにイ
チローが打つきれいな当たり

斉藤斎藤「風通し その1」

IPS細胞がこの一連をさつくり無意味にするのだろうか

今は死因の一位は老衰ではないでしょう。脳血管障害とか心筋障害とか、多分癌だと思いますが、「IPS細胞がこの一連

をさつくり無意味にするのだろうか」と言っています。万能細胞ですね、この間、京大で発見された。

あれがどんどんいけば、最終的に細胞が全部入れ替わっていつて再生される形になるから、そうすると癌もなくなる、血管障害も心筋障害もなくなる。

そうすると本当に年老いて老衰という状態でしか死ななくなる。何十年か、百年か、ずーと先にIPS細胞などの医療のお陰で死因の一位が老衰になる。その頃イチローさんは何歳ですかね。野球選手の寿命もどんどん延びているということですから、四十代なんて普通になってくる。そうすると、IPS細胞のお陰で死因が老衰になった時に、イチローさんは六十歳くらいでまだ野球をやっているかもしれない。

「イチローが打つきれいな当たり」というのも、「死因の一位が老衰になる」というのも、夢物語みたいなものですが、斎藤さんはこういうことをずーっと考え、普通ならエッセイなどで喋るべきことを、歌でいつている。斎藤さんの考えですが、エッセイは長く書かなければいけないが、歌と

いうのは一首で何か言えると。

古くて新しい歌とは

一夜花咲くを見てをりゆるやかに咲き
きさりたれば心乱るる

馬場あき子『太鼓の空間』

私たちとは振りかへるもの振りかへり
かたま 妍しき人の心みるなり

同



冬至の夜どんどこ深い闇にみて鎖を
鳴らし水を飲むもの 同

『太鼓の空間』は馬場さんの一番新しい歌集で、なかなかいい歌集です。馬場さんはいろいろな歌を作っていました。馬場さんが、ここに出しましたのは、われわれが今までこれが短歌だよと言われてきたような歌の代表であります。しかし読んでみますと少し味が違う。表面的には従来の短歌、つまり昔からある短歌の形をとっているながら、内容がすかっと、どこか新しいものがあるのです。

「一夜花咲くを見てをりゆるやかに咲ききりたれば心乱るる」、これは月下美人の花の一連の中の歌です。一晩中、自分は花が咲くのを見ておりましたよ。で、花がゆるやかに咲ききりましたよ。それを見ていたら心が乱れましたよ、という歌ですね。いい歌だなと思います。それと同時にこれは花のことだけをいっているのかな、違うのではないか。あるものが咲ききったという感じね、才能を出し尽くしたという感じ。それを見たら、自分の心がひじょうに乱れたと。

次の歌。私たちというのはひよっとこちらを振り向くではないですか。振り向いてこちらに「こんにちは」と言うわけではなくて、またさーっと逃げて行きますよね。

「妍しき」は、辞書を引きますといろいろな解釈が出ていますが、この字が女の人が二人重なっている偏に干すという字からできてくるからと、そこから何か考えようとするのはよくないですよ。

これは怠惰とか、いい加減なところがあるという、そういう意味ですね。「いい加減なところがある」といわないで「妍しき」という。風土記にある言葉だそうですが、こういう言葉が出てくると、古典に詳しい人は別ですが、われわれは辞書を引かざるを得ないです。

「妍しき」という言葉が一つ出ただけで、これは私たちのことを言っているのではなくて、私という妍しき心を持った、つまりあまりよくない心を持った、怠け者の心を持ったとかね。「やだね、この世の中は」とかなんとか言って、ふてくされていく、そういう人間の心を見定めるために、私たちは振り返って行ったのだと。

さんも八十歳で、天寿を全うされたといっ
ていいと思います。

朝光のひろびろしきに昨きのこの夜のつき
かけありしあたりを掃きぬ

森岡貞香「敷妙」

朝光がひろびろとしていた所を掃除して
いるんだよと。実はここは夕べ月が照らし
ていたあの場所だなど思いながら掃除を
していますよ、という歌です。

夕べから今朝、太陽の光と夕べの月の光
という、日月の対比をいいながら、現実
には森岡さんは箒で庭の掃除をしていらっ
しゃる、その姿ですね。

これなども何でもないことですよ。あ
あ、夕べここを月が照らしていたなと思
いながら、朝の庭を掃除をしていますよとい
うだけのことなのですが、昨夜から今朝ま
での経過してきた時の流れというものを、
思い合わせているのですね。

梅林の梅の木すべて伐れれどもここ
に来つれば梅の香のする

前登志夫「大空の干潮」

梅林の梅の木を全部伐っていった。前さ
んは山をお持ちでしたから、前さん自身か

伐ったのかもしれない。あるいは誰かに
命じたのかもしれない。

ところが、もう梅の木など一本もないの
に、そこに来ると香りがしてくる。つま
り、ないものが匂ってくるという。こうい
うことは、物理的にはあり得ないでし
ょう。

ちようど、死因の一位が老衰になった時
にイチローがヒットを打つ、なんていうこ
とは現実的にはあり得ないと同じように。

あり得ないものを、歌の中というのは作
り出す、そこに歌のよさがあると、私は
思っています。

時間がなくなってしまうので、最
後に紹介できなかった歌を読んで、終わり
とします。

『フルウエイの森』読み終えていま家
にいたのがわたしだけでよかった

小島なお「短歌」06年11月号

坂道をのぼる間の沈黙に相手をふか
く想う夕暮れ 同

水鳥をうみつづけてもしあわせにな
れないことを知っていて、産む

故・笹井宏之「未来」09年4月号

さような機能がしなくなりまし
た あなたが雪であったばかりに

3番線快速電車が通過します理解で
きない人は下がって 同

故・中澤系「uta oolix」
駅前でティッシュを配る人にまた御
辞儀をしたよそのシステムに

ぎりぎりの場所など想定しなくても
いいブルトップなら開けられる 同

